



交換留学がもたらすもの

～23年目を迎えて～

広島なぎさ中学校・高等学校
教諭 諸富 隆幸

1.はじめに

広島なぎさ中学校・高等学校の4つの教育目標に「国際性の涵養」がある。広い視野と国際感覚、コミュニケーションスキル、語学力(4技能)、自己発信力を養うことを目標としている。それに伴い、本校には様々な仕掛けが準備されている。

まず、1年を通して世界とつながり、国際感覚を身につけることができる。5月、7月にはニュージーランド、9月にはタイ、10月にはシンガポール、2月にはアメリカ、そして3月には香港から留学生が訪問し、生徒たちは交流する機会を持つ。次に、6年間を通じて、生徒たちは世界に広がる異文化体験プログラムに参加する機会がある。2年生、3年生に対しては交換留学(ニュージーランド、タイ)、4年生には語学研修(ニュージーランド)、5年生には研修旅行(ドバイ、台湾、パラオ)、そして、4年生、5年生にはお試し留学(オーストラリア)というように豊富なプログラムが提供用意されている。

その多岐にわたる国際交流プログラムの中から、本稿では2年生ニュージーランド交換留学とその教育的効果について紹介したい。

2.交換留学の目的

中高一貫教育の基礎期後半にあたる2年生では、ニュージーランド交換留学プログラムを実施している。

目的は以下の通りである。

- ①文化を肌で感じ、自分の文化を見直す。
- ②言葉や価値観の異なる人たちとの生活を通して、コミュニケーション(相互

理解)の大切さを知る。

③外国語への興味関心を高める。

指導においては、交換留学に参加する生徒だけではなく、学年全員が歓迎会、歓送会、交流会などを主催することによって、生徒一人ひとりが目的を意識するように工夫する。

3.交換留学相手校

Pasadena Intermediate School(パサデナ中学校)は2学年制の公立学校で、12クラスに10～13歳の生徒約400人が在籍する。ニュージーランド最大の都市オークランドにあり、Jonathan Hughes校長以下、約20名の教員とスタッフで運営されている。日本とは学校制度が異なり、2学年の生徒が1つのクラスに混在して授業を受けている(担任制)。考える力や行動力を養うプログラムが、ドラマや異文化理解等の多様な授業に巧みに組み込まれており、多民族の生徒たち一人ひとりの個性や能力を伸ばすことが重視されている。

このような文化で育つパサデナ生が毎年本校にもたらす異文化体験の意義は極めて大きいと言える。

4.交換留学の内容

今年度、パサデナ中学校との交換留学は23回目を迎えた。毎年15～20名程度が交換留学生として参加している。ホームステイをしながらお互いの学校で約2週間生活を共にする。身体全体でコミュニケーションをとりながらの異文化体験は、生徒の視野を大きく広げる。

今年も新緑の5月に約2週間の日程で、パサデナ中学校から交換留学生がやって来た。同年代の生徒たちは、お互いに出し物を披露し合う歓迎会を経て、すぐに打ち解け合った。授業でパサデナ生に必死に気持ちを伝える姿は普段よりも生き生きとし、休み時間はパサデナ生を囲む賑やかな時間となった。



歓迎会書道パフォーマンス

また、学年を跨ぐ国際交流の場も生まれる。交流会には他学年も多く集まり、けん玉や将棋などで盛り上がった。華道や茶道などの日本文化講座では、各クラブ部員が日頃の活動の成果を活かし、パサデナ生をもてなした。さらに、高校生ボランティアガイドが平和公園を中心とする市内散策でヒロシマを紹介した。



歓迎会インタビュー

交流の最後を締めくくる歓送会はニュージーランドのラブソングである「ボカレカレ」を一緒に歌ったり、パサデナ生へのインタビューを行ったりして、共に過ごした日々を振り返った。このように、学校全体で留学生との時間を大切に共有する貴重な2週間となった。

そして、7月には、交換留学生同士が再会する。ニュージーランドを訪れる本校留学生は、5月に受け入れた生徒の家にホームステイをし、英語漬けの毎日に戸惑いつつも、楽しく貴重な経験を心得成長し帰国する。今年も別れを惜しんだばかりの本校留学生たちが、さらなる交流を期待して、事前学習(英会話・スピーチ・出し物など)に励んでいる。

5.学びの成果

次に挙げるのは生徒の感想である。「言葉や行動が違うパサデナ生と過ごすのは大変だったけれど、歓迎会でのパフォーマンス等を見て、お互い大切にしているものは一緒なのだと思います。パサデナ生が『日本』を体験している姿を見て、自分の国には誇れるものが沢山あると改めて感じました。」(2年生女子)

「コミュニケーションは、自分から取らないといけなくて改めて感じました。言葉が違って、伝えようと思って一生懸命伝えれば伝わるもので、コミュニケーションは、心でするものなのだと思います。」(2年生女子)

パサデナ生との交流を通して、自分たちの文化を見つめなおし、誇れるものがたくさんあるという気づき生まれ



クラス集合写真

る。また、言葉が通じなくても、相手の気持ちを理解しようとし、また自分の気持ちを伝えようとする中で、相互理解の大切さを学んでいく。

パサデナ生がホストファミリーにもたらす影響はさらに大きい。次に挙げるのは、家族の一員としてパサデナ生を受け入れたホストファミリーの生徒と家族の感想である。

「僕の家に来た子は、外に出かけたりする事が好きなので、他のホストファミリーの方と基本毎日、出かけていました。家では、一緒に夕食の準備をしたり、浴衣を着せてあげたりして、家族と協力して頑張りました。そんな楽しかった日ももう終わってしまいました。歓送会はとても素敵な時間のはずですが、僕にとっては、とても寂しさを感じる辛い時間となりました。我慢しようとしていたけれど、やはり堪えられませんでした。その後のことはもうあまり覚えていません。ドアをノックしても、今は何の返事も帰ってきません。次に会えるまで2カ月間もあります。今は本当に寂しいです。1日、1秒でも早く会いたいです。今回、わずか10日間でしたが、一生の思い出になりました。」(2年生男子)

「(パサデナ生と)楽しく過ごせるように、(家族全員が)チームとして関わっていたように思います。まだ彼女(留学生)がいた部屋はそのままにしておいて!!と娘(小5)が言っています。14歳の息子がお別れ会の後、号泣し、彼の中で何か生まれ何かを感じた姿に、今回の経験は本当に良かったのだと思っています

す。相手を思いやり、何とかコミュニケーションをとっていた息子を頼もしく思いました。」(2年生男子保護者)

言葉も文化も違うパサデナ生との触れ合いの中で子どもの成長を感じるとともに、家族一人ひとりがパサデナ生と関わり合おうと協力することで、家族についても考え直す貴重な機会になる。

ホストファミリーとパサデナ生が参加するお別れ会では、別れを惜しみ感極まる生徒、そして家族を目の当たりにする。その度に、異国の地からやって来るパサデナ生がもたらす影響の大きさに感嘆する。

6.今後に向けて

この交換留学が始まり約四半世紀が経過した。その間、両校の教育内容や教員配置は変わっているが、このプログラムは当初の目的を変えずに毎年実施できている。本校を卒業し、現在、鶴学園で教鞭をとる教員の中にこの交換留学の一期生がいる。彼が生徒を引率した際に、ホスト生に再会し、現地メディアに取り上げられたこともある。このように、多くの参加生徒は事後の交流を継続し、兄弟姉妹が続けて参加したり、卒業後に再会を果たしたりすることも少なくない。

急速な国際化が進む時代で、使える語学力だけでなく、文化や価値観の違いを受容し、相互理解の大切さを学び成長できるこのような教育プログラムを今後も絶やすことなく継続させていく意義は大きい。